

【女性という「国民」の創出プロセスー日本と韓国の女子用修身教科書の比較研究】

従来の韓国近代女性史の研究動向は、日韓併合後の日本植民地政策によって、朝鮮半島の女性達の生活や意識に如何なる変化をもたらしたかと云うことに関心が注がれ、女性教育・女性運動・女性労働者の地位・農漁村の女性の状況・従軍慰安婦被害者などの角度から多くの研究成果が上がっている。植民地期だけを切り取って扱うことで、併合以前と以後の断絶がどうしても生じていたのである。本研究では、植民権力によって変容させられた朝鮮社会のジェンダー規範とは如何なるものであるかを知るべく、併合以前の朝鮮社会における独自のジェンダー規範と併合後に迫られたものまでを視野に入れて考察した。植民地の朝鮮社会において錯綜した権力関係の様子や男女の社会的関係による対応までを浮き彫りにすることができたと思う。研究した主なテキストは併合以前と以後の修身教科書であり、この中には、併合以前の朝鮮の求めていた道德規範が、併合後の植民地政策者達（日本）の意図していた具体的な行動規範が記されている。得られたいくつかの結論をまとめると以下のようなになる。

- ①伝統社会におけるジェンダー役割は必ずしも「男性は外、女性は内」といったものではない。家の全般的なことは男性が治め、家計のやりくりや男の子の教育までを担当した。しかし、朝鮮が日本をはじめとする欧米列強の外圧に直面し、国権が大きく侵害されようとした際、ジェンダー規範の再編は余儀なくされた。男性達は緊迫した社会において近代国家建設という役割を、女性達には家庭の担当者（国民なる夫のパートナーと次世代の国民の教育者）としての新しい面目が注目される。
- ②開花期に形成された理想的な男性像と女性像は伝統的規範が内在していながら、同時に欧米の思想を接ぎ木した部分もあり、国家と民族の為に献身し闘争できるもの、即ち、社会に呼び出された男性の不在に代わって女性の家庭での役割は社会的・国家的な次元とも関係があると認識し、女性教育の重要性を説いていたのである。
- ③ここで一つ注目したいのは家庭や女性の在り方が日本の影響のもとで模索されたこと。
- ④日本は、朝鮮の男性を、日本に忠誠を尽くす国民でありながら植民地社会を維持させる為の職業人と見なしており、修身教育と実業教育を上手く活用した。女性に対しては、伝統的な「婦徳」の倫理と家事に対する女性の役割を強調し、女性教育がもつ国家・社会的意味を排除し、女性に対する差別的な社会化を公式化した。
- ⑤植民権力は、女性を感化させると男性と家庭の同化も自然に行われ社会的統合を達成できるとみなし、「良妻賢母」的女性の育成を強いた。日本の植民勢力は伝統的な女性の役割や地位を「統治」という名の下で操作し、女性達の従属的役割を再創出したのである。一方、宣教師による教育はキリスト教精神の実現という脈絡から、主に家庭と母性の役割に重点を置いていたが、その教育内容は植民地の実現とは遊離されたものであった。

研究成果の公表について(予定も含む)

<p>口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等) :</p> <p>①【修身教科書にみる近代女性像—明治期と韓末期の被告研究】 金ジンスク／2006年度夏期日本史学会ワークショップ／2006年8月24日(木)・25日(金)／場所：大田ユソン・レジェンド・ホテル</p> <p>②【朝鮮の修身教科書におけるジェンダー規範の変容】 金ジンスク／2006年度第3回ジェンダー史学会／2006年11月26日(日)／場所：津田ホール <a href="http://wwwsoc.nii.ac.jp/gendershi/congre3.htm">http://wwwsoc.nii.ac.jp/gendershi/congre3.htm</a></p>
<p>論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等) :</p> <p>上記の日本史学会(韓国)とジェンダー史学会(日本)にて発表した内容を投稿すべく執筆中</p>
<p>書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等) :</p>

以上